中京学院大学経営学会
研究紀要　第10巻
2003年1月発行



# 中国古代の隠逸思想〈Ⅰ〉

久須本　弘　熙

## Ⅰ　隠逸思想の概念

中国における隠逸の思想概念は、一般的には体制思想に対して反体制の立場として解されている。それは異端の思想であり、乱世の思想でもあるといえよう。中国の思想史の流れからみると、主流思想は儒家思想である。中国の儒家思想は、社会・政治・文化などの表の部分と係わりを持つものである。それに対し隠逸思想は、それらの裏の部分、即ちそれらに背を向けた人々の思想であるといえよう。自意により社会の表の部分から逃避し、体制からはずれた人々の思想である。

中国思想の研究の大半は、正統思想である儒教的思想の究明であり、その分析であることが多い。中国思想をみる場合、正統思想・体制思想だけの究明では、中国社会全体を概観することはできない。体制思想と反体制思想とは、表裏一体をなし、中国思想の表裏を構成している。このような観点から、ここでは正統思想・体制思想に対極する一つの思想である「隠逸思想」の概略をみておきたい。

しかしながら隠逸の思想については、歴史資料そのものが世に残されにくい性質を持っている。なぜなら隠逸者は、世に入れられず、世に隠れ、世を捨て、世を逸脱した者であるからである。その事蹟・思想・生態などは、歴史に記録されることなく、為政者から抹殺・無視されるものが多いからである。その少ない資料の中から、限られたものを取り出し検討を加えたい。

中国における隠逸の思想については、古くから存在する。自己の思想が時流に合致せず、敢えて自己の信条を曲げて時流にあわせようとしない生き方である。それは社会の流れに合わせて生きることをせず清高孤独であり、名利に左右されない生き方である。客観的にみると、世を捨てて隠れ逸れる生き方やそのような人を指す言葉である。そのような意味をもつ言葉の主なものに、「隠逸」「逸隠」「隠者」「隠君子」「隠士」「逸民」「逸士」「処士」「処人」「幽人」「高士」「高人」「遺民」などの語彙を挙げることができ、その周辺語彙は枚挙にいとまがない程多数ある。ここに挙げたそれぞれの語彙解釈には、意味のずれはあるが概ね「隠逸」思想の概念範疇に入れることができよう。先ず、これらの概念語彙の各出典を挙げ、その意味概念の範疇の確認をしておきたい。

「隠逸」については、

行有茂異、民有隠逸。［漢書、何武傳］

遷魏郡太守、招聘隠逸。與参政事、無為而化。［後漢書、岑彭傳］

とあり、いずれも世を隠れ遁れる意、またはその人を指している。加えて、正史列伝にもその目があり、隠逸者の伝記をおさめている。（晋書・宋書・隋書・南史・北史・旧唐書・唐書・宋史・金史・元史・明史にある）　「隠逸」に類似する語句として、「隠耕」「隠居」「隠君子」「隠操」「隠士」「隠者」「隠静」「隠民」「隠滞」「隠逃」「隠遁」「隠遯」「隠淪」などの語句がみられる。これらの周辺語句の意味も近似の概念範疇に入ると思われる。これらの語句の使用意味概念及びその出典は次のようである。

「隠耕」については、

伯成子高、不以一毫利物、舎国而隠耕。［列子、楊朱］

不願夫子相荊、相将避禄隠耕。　［嵇康、老莱妻賢名詩］

とあり、人に隠れて耕す意であるが、内容的には世をのがれることの比喩として使われている。

「隠居」・「隠処」については、

隠居以求其志、行義以達其道、吾聞其語矣、未見其人也。［論語、季氏篇］

允許東海之上、未嘗聞社稷之長。［史記、張儀傳］

隠居為蔽、而戦為鋒行。［淮南子、人間訓］

とあり、この語は隠れて世に出ないことから世事を捨てるという意をもつ。

「隠君子」については、

老子、隠君子也。［史記、老子傳］

借問故園隠君子、時時来往住人間。［儲光義、寄孫山人詩］

とあり、この語は世をのがれた成徳の人という意である。やはり、何らかの理由において時の世人との交わりを避けている人である。

「隠操」については、

伯玉少有隠操。［南史、隠逸上］

とあり、この語は隠逸の心をもち、俗世からのがれたいと願う気持ちを表す語である。

「隠士」については、

天下無隠士、無遺善。［荀子、正論］

世論以点為孝隠士。［南史、何点傳］

子曰隠者也、使子路反見之、至則行矣。［論語、微子］

とあり、この語は「隠者」と同義であり、世の中をさけている人のことである。内容的には、俗世に交わることを避け、孤高を守っている人をさしている。

「隠静」については、

善処当世朝中勢、素多與交游、故不能事隠静。［南史、儒林、伏挺傳］

杜微修身隠静、不役当世。［蜀史、杜微傳評］

とあり、この語は静かに世をのがれて居る意である。

「隠民」については、

政自之出久矣、隠民多取食焉、為之徒矣。［春秋左氏、昭公二十五］

とあり、いろいろな災厄をのがれている民の意であるが、この語と同義のものに「遺民」が

ある。この語は第一義的には生き残っている人民、又は亡国の民の意での使用例が多い。前朝の人民で義を守り、新朝に仕えないものという意である。その結果、現在の社会で現朝の政治のもとでの生活することを潔しとせず、山にのがれ暮すものと解すれば、「隠逸」の範疇に入るものと思われる。「遺民」についての出典をみると次のようである。

「遺民」については、

衛之遺民男女七百有三十人。［春秋左氏、閔公二］

雲漢之詩曰、周余黎民、靡有孑遺、信斯言也、是周無遺民。［孟子、萬章上］

とある。

以上のように、隠逸の思想は時代を通じて多くの名称で表されている。正史には、『後漢書』 に「逸民伝」が入れられてから、『晋書』『宋書』に「隠逸伝」、『南斉書』に「高逸伝」、『梁書』に「処士伝」、『魏書』に「逸士伝」の項が設けられ、『隋書』以降は『明史』まで「隠逸伝」の項が設けられている。ただ『旧五代史』と『遼史』には、この項目はもうけられていない。

これらをみると、「隠逸」への心情・行動的契機として、乱世社会のために自己の信条を遂行できないことによるものである。加えるに、山水に対する憧憬、自己の狷介な性格、世俗社会からの逃避願望などがあろう。隠逸者の一般的共通点として、孤独・清貧・反体制的生き方などが挙げられる。これらの各共通点については、概略次のような考察ができよう。

孤独については、次のようにみることができる。隠逸者の孤独とは、一般的な意味での社会的な交流から離れていたということである。古くは、社会との交流を途絶に近い形で断ち、山林や岩窟に起居した者を指した。しかし隠逸者の隠れた場所の多くは、地方の田園であり、家庭であった。世俗的環境の中で、いかにしてその社会との交流を断ち、個人的孤独を求めるかを務めたのである。ここでの隠逸は、田園帰といわれるごとく、寧ろ超俗的なものである。陶淵明は、空を流れる雲に己をみた。雲は世俗社会の上も通りすぎるが、世俗にそまらず・わずらわされず其れを超越して無心かつ自然のままに浮漂する。そのような雲に自己の生き方を見出そうとした。

清貧については、次のようにみることができよう。「貧」は「富」の対極にある概念で有り、「富」が人の願うものであるのに対して、「貧」は人が憎むところのものである。隠逸が貧と連動しているものであることについては、多くの説明は不要であろう。隠逸の生活は、貧ではあるが平静有閑の生活ができ、教養が積める身分である。貧は好ましいものではないが、隠逸は貧でありながら、貧にとらわれない。貧を貧でなくした境地を求めるものが清貧なのである。即ち、『論語』「述而篇」に清貧の喩として、

子曰、飯疎食飲水、曲肘而枕之、楽亦在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲。

と清貧の境地を詠っている。即ち、質素な生活をしていても、楽しみはそこにあるものである。道ならぬことで富貴になることは私にとってははかないものであり、無縁なものであるという。貧を憎むのではなく、貧を楽しむ境地なのである。だから清貧は貧からの超越であり、それは富からの超越でもあった。人の憎む貧を好ましいものに転換する価値転換なのであり、同時にそれは貧からも富からも超越し、かつ捉われない自由の概念として把握されることになる。

反現世的生き方については、次のようである。陶淵明の「帰園田居其一」に「拙を守りて園田に帰る」とある。俗世において、栄達を作為する巧者の生き方と対照的である。作為・人為を非自然であるとして、極力自然のままにあるのが人間の自然の生き方であり、好ましいものであるとする老壮の中心思想でもある。

## Ⅱ　隠逸と政治

中国思想の中核をなすものは、政治思想である。これは中国人の現実主義的発想に、その根拠を求めることができる。中国の正統な政治・社会・文化思想は、儒教思想がそれを支えている。それは国家の知識階級が、その関心の対象を政治においていたことにもよる。政治の担当者である士大夫は、知識階級であることが要求された。その政治担当者としての士大夫は、経学を修めたものであることが必須条件であり、政治と学問としての経学は結びつくことになる。身を立てる方策としての学問は、経学であり、それは政治家になることでもある。しかしながら、これら知識階級の政治に対する態度は、もちろん一様ではない。関心の強弱・信条や境遇・環境や機会などによって体制・反体制、及びそれぞれの右派・左派・中間の立場を取るものがある。このように政治への関心は、さまざまあると思われるが、このうち体制外に身を置く者として隠逸者・逸民がいる。これを表現する語彙として、先に掲げた「隠耕」「隠居」「隠君子」「隠操」「隠士」「隠者」「隠静」「隠民」「隠滞」「隠逃」「隠遁」「隠遯」「隠淪」「高士」「高人」「処士」「処人」「逸士」「逸隠」「幽人」などの語句がみられる。これらの語句、及びその周辺語句の意味も、近似の概念範疇に入ると思われる。これらに共通することは、王朝交代に際して、前王朝に傾倒し新しい王朝を拒否したり、その王朝下の政治社会に入ることを否定することによって政治を暗に批判し、自己の信条に忠実に生きようとすることなどが挙げられる。これらの政治に対する態度のあり方は、中国人の出処進退のあり方を表している。『易』の「乾卦文言伝」に、

初九曰、潜龍勿用、何謂也。子曰、龍徳而隠者也。不易乎世、不成乎名、遯世无悶、不見是而无悶。楽則行之、憂則違之。確乎其不可抜、潜龍也。

とある。「潜龍」とは、龍徳を備えながら、まだ世に現れないもののことである。世俗に迎合することもなく、名声を求めることもない。隠遁を余儀なくされても不平を抱かず。誰にも正しいとされなくても不満を抱かない。泰平の世にあっては朝廷にあって道を行い、衰乱の世には引きこもる。道を守ること確固不抜、これが「潜龍」である。聖人で世に出ないで民間に混じって隠れている人、英雄などの比喩として使われている。このような人は社会状況によって主義主張を変えることなく、そのうえ世に名を出すことを考えていないから、世に認められずとも不平憂悶を抱くことはない。『易』「大過卦大象」にも、

象曰、沢滅木大過。君子以独立不懼、遯世无悶。

とある。聖人は君臣の道が隔絶するときは、野に隠れて出ないのである。そして、「不事王侯、高尚其事。象曰、不事王侯、志可則也。」（『易』「蠱卦上九」）とあるように、自己の処し方を高潔にしている。同じく「遯卦彖伝」に「遯之時義、大矣哉」といわれているが、出処進退に対する関心の強さを示すものである。

ところで、このような民（隠逸民）の意味するところと出典についてもみておくことにする。「逸民」については、『論語』「微子篇」に、

逸民、伯夷・叔斉・虞仲・夷逸・朱張・柳下恵・少連。

とあり、［集解］（古注）によると、「何晏曰、逸民者、節行超逸也」とある。古来、遺逸の民、すなわち志高くして位なく、世をのがれ世人から忘れられている賢人として名高い七人がいる。［集注］（朱子）によると、「逸、遺逸、民者、無位称」とあり、同じく『論語』「微子篇」に続けていう、

子曰、不降其志、不歯辱其身、伯夷・叔斉與。謂柳下恵・少連。降志辱身矣、言中倫、行中慮。其斯而已矣。謂虞仲・夷逸。隠居放言、身中清、廃中権。我則異於是。無可無不可。

と。このように「逸民」とは、人格・学問において知識人であり、人生の生き方において独自の理想を持ち、清高にして名利を求めず、精神的に俗世から遊離して民間に隠れ住む人を指す。『論語』「尭曰篇」には、

舉逸民、天下之民帰心焉、所重民食喪祭。

とあり、在野の知識人である世捨て人を用いれば、天下の民は心を寄せるとある。『論語』「泰伯篇」「述而篇」に、それぞれ次のようにある。

子曰、篤信好学、守死善道、危邦不入、乱邦不居、天下有道則見、無道則隠、邦有道、貧且賤焉、恥也、邦無道、富焉、恥也。

冉有曰、夫子為衛君乎、子貢曰、諾、吾将問之、入曰、伯夷・叔斉何人也。子曰、古之賢人也。怨乎。出曰、夫子不為也。

と。学問を好み、命懸けで道をみがく。危乱の国には行かず、天下に道あれば現れ、道のない時には隠れる。また「述而篇」で謂うように、孔子は伯夷・叔斉の生き方を次のように評価する。先代の君主が自分を後継者と定めた意志を、先代の意志である故に重視すべきか、または先代の意志はそうではあっても家族の順序として長上に譲るべきか、その葛藤になやんだ人物である。この話について、子貢は尋ねたのである。これに対しての答えは、先代の君主の意志という形式的な事柄よりも、長者に対する自然の愛情と尊敬とをより重要としたのである。つまり孔子は、伯夷・叔斉の人倫の道を重視していることになる。このように伯夷・叔斉によって代表される「逸民」は、仁を理念とする儒家的な人々である事が分かる。『論語』「微子篇」に、次のようにみえている。

長沮桀溺　而耕、孔子過之、使子路問津焉、長沮曰、夫執輿者為誰、子路、為孔丘、曰、是魯孔丘與、対曰是也。曰是知津矣。問於桀溺、桀溺曰、子為誰、曰為仲由、曰是魯孔丘之徒與、対曰、然、曰滔滔者天下皆是也。而誰以易之、且而與其従辟世之士哉。而不輟、子路行以告、夫子撫然曰、鳥獣不可與同群也。吾非斯人之徒與而誰與、天下有道、丘不與易也。

と。これを見ると、長沮・桀溺は単なる農民ではなく、知識人が農民に身をやつした隠者である。彼等は、孔子が虚しい理想主義のために、あくせくと改革の意志をもつのを、また子路がそれにつき従っているのを批判し、あっさりと人間など思いあきらめてしまえという。そして我々のような隠士に従った方がよいのではないかという。それに対し、孔子は、人間こそ私の愛するものである。その人間に道の行われている時代なら、私はなにも世の中を改

めようとは思わないのだが、と孔子は謂う。続けて『論語』「微子篇」に、荷蓧丈人の説話を挙げて、

子路従而後、遇一丈人以荷蓧、子路問曰、子見夫子乎。丈人曰、四体不動、五穀不分、為夫子、植其杖而立、止子路宿、殺鶏為黍而食之、見其二子焉、明日子路行以告、子曰、隠者也。使子路反見之、至則行矣。子路曰、不仕無義、長幼之節、不可廃也。君臣之義、如之何其可廃也。欲潔其身而乱大倫、君子之仕也。行其義也。道之不行也。已知之矣。

という。子路が孔子の伴をしていた時、孔子とはぐれてしまった。その時、一人の老人にであった。子路はその老人に尋ねた。「先生を見かけませんでしたか」と。老人は答えた。「手足も動かさず（労働もしない）、五穀の見分けもつかない男。それがなんで先生か」と。老人はせっせと田の草をむしり続けていた。子路は老人の言にある種の尊敬と当惑を感じ、手を組み合わせたまま立っていた（敬意の表示）。老人は子路を引き止め歓待した。その時に二人の息子を引き合わせた。後日、孔子はこの話を聞き、それは隠遁者であるといい、もう一度訪問させた。留守であったので、子路は言い残してきた。「あなたたちは役人として世の正道のために奉仕していない。つまり気ままな隠遁者である。それは人間としての道理を失っていることになり、人間の道理を部分的に尊重しているとする。即ち、子供のしつけがよく、私に合わせたのは、父子長幼のきまりをすて得ないとするからだ。だとすると、君臣の道もどうして廃棄できよう。あなたは個人の生活を清潔にしようとして、大きな倫理を乱している。君子が官吏として奉しするのは、道を行うためである。いまの世の中が道の行われない世の中であることは、とっくに分かっている。」（理想の行い難い世の中であることは、知っているけれども、しかし理想を放棄せず、あくまで理想のために、理想に従って生きるのがわれわれの態度であるの意。）

ここでは、隠逸者である老人の考えと儒教者である子路との各思想が両極にあることが分かる。隠逸者である老人たちは、手足を動かす労働に従っている。一方、孔子・子路たちは、鳥獣とは同じ仲間として一緒に生活することはできない。いかなる乱世でも人民を見捨てるべきではなく、社会を改変すべきであると説く。仕えなければ義はないが、社会人である以上、長幼の序は廃することはできない。君に仕えるべき身分である君子にとっては、長幼の序を守ることと同様に、君臣の義も廃することができないものである。隠者の場合は、自身の身を清潔に保持しようとして、重大な人倫関係を乱すことになる。だから君子が仕えるのは君臣の義を行うことであるとし、知識人であるからには、仕えて政治に係わるべきであるとしている。このようにみると、「逸民」が儒教的であるのに対して、「隠者」が道教的であることが分かる。

やがて秦・漢世になると四皓（東園公、綺里季、夏黄公、用里先生の四人の老人、鬚眉が皓白であったのでこのように呼ばれている）がおり、秦の世を避けて山に隠れ、危ない国を避けて身の安全を図ったといわれる。『漢書』「王貢等傳序」に、

漢興有園公、綺里季、夏黄公、用里先生、此四人者、当秦之世、避而入商雒深山、以待天下之定也。［注］師古曰、四皓称号、本起於此、更無姓名可称、知此蓋隠居之人、匿跡遠害、不自標顕、秘其氏族、故史伝無得而詳。

とある。『漢書』には隠逸に関する傳は特に設けられていないが、「王貢両龔鮑傳」には隠逸

の思想とその行為に強い関心を示している。

ところで「逸民」が正史に「傳」として設けられたのは、『後漢書』「第七十三巻」に「逸民」列傳として「野王二老、向長、逢萌」はじめ14名の傳が列挙されているのが最初である。新しく逸民列伝が設けられた経緯はわからないが、『後漢書』「逸民列伝」序に、著者范曄は次のように言っている。

易称遯之時義大矣哉。又曰不事王侯高尚其事是以尭称則天不屈潁陽之高。自茲以降風流弥繁、長住之軌未殊而感致之数匪。

著者范曄自身の考えと時代・社会が、そのように認識したことの証なのであろう。中国の第一級の歴史書にこの項が新設されたことは、隠逸の思想に対する価値の追認でもあった。先述したように、逸民は現政治に対する暗黙の批判者なのである。彼等はただいたずらに隠棲しているのではなく、その行為に限りなく政治批判を込めている。自己の生き方を高潔にし、自らの意志で仕官を辞し、全ての名利から遠ざかりそこに価値を置かない。

王莽が前漢王朝を簒奪した時、義憤して冠を破り朝廷を去り、多くの者が隠者となった。光武帝はそのような隠者を招聘することに意を注いだ。薛方・逢萌・厳光・周党などである。ついで章帝も逸民を用いることに意を注いだ。やがて帝王の徳は衰えてゆき、宦官が権を握りはじめる。在野の隠者は憤慨し、より一層政治から離れようとし、隠棲を善として自らの潔白を守ろうとした。後漢中期以後は、外戚と宦官との闘争時代であり、このような世であったからこそ色々な動機によって逸民が出てきたのである。『後漢書』「逸民列伝」の序では、この逸民を次のように分類している。

或隠居以求其志……。或曲避以全其道……。或静巳以鎮其躁……。或去危以図其安……。或垢俗以動其既……。或疵物以激其清……。

然観其甘心　畝之中憔悴江海之上、豈必親魚鳥楽林草哉。亦云性分所至而巳。

この「或隠居以求其志」は、『論語』「季氏篇」の

孔子曰、見善如不及、見不善如探湯、吾見其人矣。吾聞其語矣。隠居以求其志、行義以達其道、吾聞其語矣。未見其人也。

に出典を求めることができる。内容概略は、「善を見れば、早く追及せねば追いつかないかのように熱心に追及し、不善を見れば、あつい湯の中に突っ込んだ手をさっと引っ込めるように遠ざかる。そうした人間を私はこの目で見た。またそうした人間の存在を、古い言葉として聞いている。ところで下積みの隠遁者として生活しながら自己の理想を追求しつづけ、正義を行って自己の方法を貫通しようとする人間、それはその存在を古い言葉としては聞くが、現実には未だ巡り合わない」という意である。中の「隠」は隠遁の意であろうが、必ずしも逃避的消極的な隠遁者ではなく、社会の下積みとして目立たぬ生活をする人という意である。更に言うならば、文中の「隠居以求其志」は、世に用いれられないために、野に下って隠れ棲んでも、一旦世に出た時に行なおうとする済世治民の志を捨てないで、ますますその志が高からんことを求める意である。だから、次の「行義以達其道」と合わせて、理想の君子の進退といえよう。唐の李賢らの『後漢書』注によると、

隠居以求其志、行義以達其道、求志謂長沮桀溺、全道若薛方詭対王莽也。

といい、長沮・桀溺の生き方を示している。

「或曲避以全其道」は、先の『論語』「季氏篇」の同じ個所、「孔子曰、見善如不及、見不善如探湯、吾見其人矣。吾聞其語矣。隠居以求其志、行義以達其道、吾聞其語矣。未見其人也」の「行義以達其道」を指している。それは正義を行ない、暴力を避けて自己の生き方をまっとうすることである。前漢末の薛方の生き方である。

「或静巳以鎮其躁」は、自己の精神を静めて道を修める逢萌の生き方である。

「或去危以図其安」は、将来が危ないと予想される国から去り、先ず身の安全を図る生き方であり、四皓の生き方にあたる。

「或垢俗以動其既」は、俗世は汚濁の世とみ、気概を奮い起こす生き方であり、申徒狄・鮑焦などの生き方である。

「或疵物以激其清」は、名利に心を動かされず、清廉の心をより磨く生き方であり、梁鴻・厳光らの生き方である。

彼等の生活をうかがうに、田園での生活に満足し、あるいは江海のほとりに憔悴している生活ぶりをみると、心から隠棲を楽しんでいたわけではなく、やむにやまれぬ状況でそうなったのであろうことが分かる。

『後漢書』「逸民傳賛」に次のようにある。

賛曰、江海冥滅、山林長往、遠性風疎、逸情雲上、道就虚全、事違塵枉。

と。その俗世間を離れた境涯は、風の如く爽快であり、志は隠棲にあってあくまでも高い。悟道においては無欲を会得し、処世においては濁世に背むいた姿勢をとる。このように『後漢書』にはじめて逸民傳が設けられたのは、儒教が国教となり名節を守るために俗世を避けて、田園・山野に隠棲するという気風があった。これは『後漢書』の著者范曄の時代における風潮とも共通した。南朝政治は軍事関係者に支配されており、安定した政権ではない。そのような政権に加担した場合、政権交代はその瞬間に自分が誅殺または疎外されることを意味する。このような時代を生き抜き、且つ意志を貫く方策として隠逸がある。能動的隠逸行動は、政治的行動からの逸脱と同時にそれは反体制の意志行動の現われでもあった。後漢から魏晋にかけて、乱世を厭い隠遁・隠棲するものが多くいた。隠逸は乱世から生まれるものが多いのが一般的である。そのような者は、清貧であり、退譲の精神の持ち主である。加えて、魏晋から六朝時代にかけての老荘思想の流行は、俗世を嫌い隠遁を賛美する風潮を流行させた。老荘思想の生き方は、自然と一体となり、其の世界に積極的に生きようとする生き方である。それは消極的な逃避的あり方ではなく、自適・自得という積極的なあり方である。

一方、江南の風光明媚の中で、脱政治を求める生活に価値を見出す者が出てくる。それは芸術・学問・宗教の分野に現れる。この思想にも老荘思想の影は大きい。官僚生活を俗とし、田園山野での自由な精神の高揚を求めるものである。この風は、官僚人の腐敗社会を厭う人が多くなることと相俟って、知識階級の共感を得、一般社会に広まっていった。

前述したのように、「隠逸」は「隠」と「逸」に区別されている。そのうち「隠」は道教的意味あいをもち、「逸」は儒教的意味あいをもっている。『後漢書』の「逸民傳」は、儒教思想による名節をその背景にもっている。しかし魏晋時代になると、両者は明確な区別をされず、所謂「隠逸」という一般的概念で包括されるようになった。これは老荘思想が儒教思想に及ぼした価値観の変化への影響といえよう。だから「自適」としての隠逸は、その後の

隠逸の主流を占めることになる。南朝時代になり、江南の自然の風景は、人々の精神を包容し、そこに精神の安らぎを与えた。その結果、自然・山水・脱政治・隠遁・老壮思想・安らぎ・自適・自得という流れが構築されていくことになる。その世界は、厳しいものであり、清貧にして孤高、知識人にして脱俗世であり、彼等は社会的にも意義ある存在として位置されていた。しかし魏晋時代以降、老荘思想、仏教思想、官僚の腐敗政治などの社会状況が加わることによる隠逸の一般化によって、それまでの厳しく区別されていた隠逸の思想は、変質し、他人に違背することをもってその意味を表すようになってきた。

梁の沈約は『宋書』「隠逸傳」で、次のように賢人の「隠」と荷蓧の「隠」との二つに区分している。さらに「身隠」を「道隠」と比較し、低い次元にあるものとしている。

夫隠之為言、迹 不外見、道 不可知之謂也。若夫千載寂寥聖、聖人不出、則大賢自晦、降夷凡品、止於全身遠害、非必穴処厳栖、雖蔵往得二鄰亜宗極、而挙世莫窺、万物不観。若此人者豈肯洗耳潁濵、皦皦然顕出俗之志乎。……今 為隠逸篇、虚置賢隠之位、其余夷心俗表者、蓋逸而非隠云。

と。即ち、隠とはその行動が外に見られることなく、その道は分からない状態にあるものである。自分の才能を隠し、凡才の人の中に身をおき、身を全うして害を遠ざける。だから必ずしも山野谷窟に隠棲する必要はない。『論語』「述而篇」に、「用之則行、舎之則蔵」とある。これは自分を認めてくれるものがあれば、出て我が道を用い、世の中から見捨てられた場合は、抱負を心の中にひそめて、じっとかくれるという意である。即ち、用いられんがための学問修養ではないが、もし知っているものがあったら、その信任にこたえて大いに働くだけの平素からの用意がのぞましい。不幸にして用いられない時でも、自暴自棄にならずに学問と修養を積んで、常に道とともにありたいものであると解せよう。ただ世に出て出仕しない場合は、その才能をうかがうことができない。このように自晦するのが賢人の隠であり、真隠である。これに対して巣父や披裘公は、『論語』にみえる荷蓧丈人の隠と同じであって、賢人の隠ではない。賢人の隠が自晦であるのに対して、荷蓧丈人の隠は他人に違背する行動をしたというだけである。だから自分の身が隠れるのが隠者であり、自分の道が隠れるのが賢人であるといって、賢人の隠と荷蓧丈人の隠との二種類に区分している。沈約の考える真隠は、道隠であるからその場所にはこだわらない。沈約は官途にいて、隠逸を志向したのを考えると理解できる。

『梁書』「処士傳」には、次のように言う。

古之隠者、或恥聞禅代、高譲帝王、以萬乗為垢辱、之死亡而無悔。此則軽生重道、希世間出。隠之上者也。或託仕監門、寄臣柱下、居易而以求其志、処汗而愧其色。此所謂大隠隠於市朝、又其次也。或躶体佯狂盲瘖絶世、棄礼楽以反道、忍孝慈而不恤。此全身遠害。得大雅之道。又其次也。然同不失語黙之致、有幽人貞吉矣。

と。ここには、山林に隠れるもの、市朝に隠れるもの、世間の秩序に従わないものとある。この中で市隠とは、世をのがれて市中に隠れることである。『晋書』「鄧粲傳」に、「隠之為道、朝亦可隠、市亦可隠、隠初在我、不在於物」とあり、王康琚の『反招隠詩』に「小隠隠陵藪、大隠隠朝市」とある。陵藪の隠を小隠とし、朝市の隠を大隠とする。

先の『後漢書』「逸民傳」は、逸民としての在り方を説いているが、『宋書』「隠逸傳」では、あるべき隠逸の姿と現実の隠逸の姿が説かれている。市隠はあるべき隠逸の姿としての

承認なのであり、それまでの場所のこだわりはなくなっている。

『旧唐書』「隠逸伝」には、

前代賁丘園、招隠逸。所以重貞退之節、息貪競之風、故蒙叟矯讓王之篇、玄宴立高人之傳。箕潁之迹、燦然可観、而漢二龔之流、乃心王室、不事莽朝。忍渇盗泉。本非絶俗、甚可嘉也。皇甫謐 陶淵明 慢世逃名、放情肆志、逍遥泉石、無意於出処之間。又其善也。即有身在江湖之上、心遊魏闕之下。託薜蘿以射利、仮巌壑以釣名。退無肥遁之貞、進済時途乏具。山移見誚、海鳥與譏。無足多也。

とあり、隠逸の者が尊崇されるのは、貞退の節を重んじ、貪競の風を息めさせるからであるといい、隠逸の存在価値を認めている。そして隠逸の士を三区分し、第一には乱世を避けて、時の政治社会から逃避し、自分の高く清い志を捨てずに生きる生き方、第二には田園山野に自適する生き方である。これら二つは隠逸の士としての生き方として、社会から容認されている生き方である。第三には、身は田園に在りながら、時の政府に心をよせ、形は隠遁の風ながら、それは名を得るための装いに過ぎない生き方である。この生き方には貞節が無く、隠逸の精神があるとはいえないものである。

『新唐書』の後に世に出た『旧唐書』「隠逸伝」序によると、隠逸者を三つに区分している。第一は、身を隠し道を隠さない生き方、第二は、時の政治社会にあわないために敢えて社会に交わらない生き方、第三には、山野に隠れ俗世との交わりを絶つ生き方である。しかして唐代の隠逸としては、下概の者であるとしている。

隠逸の捕らえ方が、『旧唐書』は乱世からの逃避から自適へ、さらに名利のための隠逸へと展開している。これに対して『新唐書』では、類型分類をして、段階づけている。両書ともにその思想として、貞退の節、その素を保つところに価値をおいている。またその亜流としては隠逸に身を仮り、出仕の手段とするようになった。

唐代在野の隠逸者としての代表に王績が挙げられよう。彼の生き方は乱世からの逃避であると同時に、保真の手段として自適という生き方もした。彼にとっての隠逸とは、世に捨てられた者を指すのではなく、自ら世を捨てた者なのであり、隠逸そのものが主体性をもつものである。

唐代の道士は、超俗的な求道者であり、現実の世界からの逃避という点では隠逸と共通するが、その求めるところは宗教的な点である。

また唐代では、特に文学との係わりを見逃すことができない。詩人は往々にして政治であり、文学と政治との係わりがある場合が多い。しかし文学者としての詩人は、精神的には自由人である。その文学によって培われた精神の自由は、精神の統制管理を旨とする政治から遠ざかる方向にあるのが一般的である。その方向としては、自然への没入であり、かつ内面的世界において政治からの超越を求めることである。是非を超えたところに己をおき、外物や現象にとらわれない。だから俗世や仕官のうちに在りながらも、それにとらわれないからその中に身を置いても、隠逸の精神に何の変化ももたらさないことになる。しかしそのような超俗的生き方はなかなか難しいが、一方隠逸者が広く世人の認知を受けるようになると、隠逸に名を借りた隠逸者が出てくるのは世の習いである。その時流は隠逸の一般化をもたらすことになり、それが唐代隠逸思想の特徴といえよう。

（紙面の関係で続きは次号にまわす）